

“なんとなく進学”を打破し、やりたいことを軸に 進学も就職もフラットに選べる進路指導へ

四條畷学園高校（大阪・私立）

“外部連携”と“対話”を重視した 新コースの挑戦を突破口に

普通科に「総合キャリア」「発展キャリア」「特進文理」「保育」「6年一貫」の5コースを設置する四條畷学園高校。職業を知る講座や大学・専門学校の授業体験などを組み込んだ3年間の計画的な進路指導を行い、卒業後は約9割が大学・短大・専門学校に進学している。進路指導部長の持永先生は、このプログラムにより進路決定時期が早まっている効果を感じる一方で、生徒の視野の狭さに問題意識をもつ。

「進路を早く決めて安心したい気持ちから、指定校推薦のなかから選ぶとする生徒が多い。誰かから与えられるのではなく、生徒自身がやりたいことをしっかり考え、自分で進路を決めることが大切ではないか」(持永先生)

それに対する突破口を開きつつあるのが、2019年開設の発展キャリアコースで始めた新しい取組だ。

その特徴の一つは、多様な外部機関・講師と協働し、社会でどう生きていくかを考えさせる活動の充実にある。教員は日頃からアンテナを立てて連携先を模索しており、これまでNPO法人、ミネルバ大学生、生命保険会社のライフプランナーなどとの協働による多彩な講座やワークショップを実施し、生徒の興味関心を最大限に引き出してきた。20年度は新たに、学生と社会人が当たり前に関わる社会づくりを目指す団体ANOTHER TEACHERと共に1週間の交流イベントに挑戦。団体と議論を重ねて内容を練り、コロナ禍で軌道修正を図りな

■ANOTHER TEACHER企画講義例

- ・パイロットについて
- ・海外で働くということ
- ・起業までの道のり
- ・これから求められる IT 人材
- ・大学は何の為に行くの？
- ・これから求められる社会人としての素質
- ・夢の見つけ方 … など

がら、多様な職業のキャリアをもつ社会人16人の生き方についての講義と、社会人7人が生徒の悩みにアドバイスするワークショップをオンラインで開催し、好評を得た。

「教師だけの狭い世界観に生徒たちをとどめないよう常に意識。イベントのほか、新聞を活用した時事問題ワークの導入などで、生徒の社会への関心はずいぶん高まってきています」(発展キャリアコース・岡本先生)

しかし、「社会に触れるだけでは、生徒自身の目標を見つけるには不十分」と岡本先生。「海外に興味があるから通訳」のように短絡的に考える生徒も多いなか、自らの興味関心を掘り下げて多様な進路の可能性を拓くため、「対話」を重視した支援にも取り組んでいる。それが同コースの進路指導のもう一つの特徴である。

教員も日頃から生徒一人ひとりへの声かけを心掛けているが、加えて、3学年では国際教養大学の学生団体と連携した新しい取組を開始。探究活動を深めるサポート役として生徒に一人ずつ大学生が付き、Slack(メッセージングアプリ)やZoomで生徒からの質問や相談に対応している。

「教員志望の学生たちということもあって問いかけがうまく、丁寧に生徒の思考を広げてくれる。対話の内容は探究テーマにとどまらず、生徒は進路の相談をすることも。年齢の近い学生の協力によって、生徒の想いに寄り添ったアドバイスを組織的に行っていければと考えています」(岡本先生)

Slackのチャンネルには担任も参加し、対話履歴は文書にまとめてGoogle上で共有。また、教員側と学生側のリーダーは定期的に連絡を取り合い、足並みを揃えている。「促す・紹介する・見守る・褒める、を進め、『教師』の定義を組織的なファシリテーターに変えていきたい」と岡本先生。

こうした新しい取組のなか、生徒の進路選択にこれまでに見られない傾向が見られるようになった。今年度3学年になった同コース一期生には、難易度にとらわれず、自分の

興味関心を軸にした多彩な進路希望をもつ生徒が多い。

「生徒の中に、自分の興味関心を大切に進路について考えようという意識が育っています。だから、ちょっとしたきっかけで『これだ!』と思った瞬間、ものすごいスピードで変わっていく。この子こんなに意欲的やったんや、と新たな一面を見せてくれる生徒もいます」(岡本先生)

高卒就職にも光を当て 支援体制を整備

発展キャリアコースでの取組を参考に、今後は他コースの進路指導も見直しを図り、より多くの生徒の可能性を広げていく計画だ。そのなかで、現在はごく少数である高卒就職という選択肢にも光を当てる。

「きっかけは単純に、うちの学校はなぜこんなに就職者が少ないんだろう?と思ったことです。やりたいことが明確にあるなら、進学せずに就職する選択もあるはずが、現状は『なんとなく進学』が多い。本当にやりたいことに向かって何が最も良いのか、就職も含めてもっとフラットに考えてもいいのではないのでしょうか」(持永先生)

第一段階として、20年度から就職支援企業(株)アッテミーと協働した求人開拓や就職指導を開始。教員の指導スキル向上とノウハウの蓄積を図り、生徒が自分の将来を切り拓いてやりたいことを実現できる“進学でも就職でも頼れる学校”を目指している。

「生徒の進路選択を狭めているのは、実は教員の固定観念が大きいのかもかもしれません。まずは教員が進路指導に関する視野を広げることから始め、自分でしっかり考えて進路を決められる生徒を育てていきたいと思っています」(持永先生)



左から、発展キャリアコース第3学年(1期生)担任・岡本創太先生、進路指導部長・持永大輔先生。

成績で決める進路指導を脱し 生徒を多面的に伸ばす学校へ

諫早高校(長崎・県立)

“偏差値の話NG”のキャリア検討会を軸に
学校の文化を変える

成績に基づく受験校決定のための進路検討会を行う学校は多いが、諫早高校はそれに加え3年前より、生徒のキャリア支援のため、偏差値や成績の話は一切しない「キャリア検討会」を実施している。

同校は国立大学進学実績を誇る地域トップクラスの進学校だ。「生徒はひたすら勉強にエネルギーを注ぎ、自分が何者かを考える暇もなかった」と前進路指導主事の後田先生。もっと生徒がもつ多様な力を伸ばそうと、課外学習や課題を減らして生徒に時間を預けるとともに、外部講演会の企画・運営を任せるなど生徒の主体的な活動の場を創出。そこから火が点き、自ら学校行事の企画や海外ボランティアなどに挑戦する生徒が出るようになった。そんななか、「生徒がどんな活動をして、どう成長しているか、多くの先生方に知ってほしい。模試結果だけでなく志望理由を語る面談につなげてほしい」(後田先生)と始めたのがキャリア検討会だ。

同会は学年団と進路指導部が参加し、1学年12月、2学年10月、3学年5月に実施。志望大学や活動内容などが記入された生徒個人票から、特に多様な活動で伸びそうな生徒を選んで取り上げ、学校ができる支援をみんなで考えていく。例えば1学年であれば、関心の方向性が近い生徒同士や外部イベントを紹介して活動を広げる「人つなぎ・場つなぎ」。2学年ではこれから参加できるコンテストなどへの挑戦促進。今年度から導入した3学年では、多様な入試方法を見据えた準備につなげる。

こうして背中を押されて活発化する生徒たちを核に、さまざまな活動をしながらキャリア形成していくことの価値が校内に浸透してきた。「先生方は日常的に『こんな活動している子がいるよ』と話すなど、生徒を多面的に見ている」と園田先生。今春は初めて海外大学進学者も出るなど、後田先生が言う「とがった進学先」を狙う生徒たちが増加。出口が変わると入口も変わり、「この学校でこんなことがやりたい」と多彩な生徒が入学してくる。「学習に力を注ぐ生徒もいれば、校内外の活動を重視する生徒もいて、お互いにリスペクトし合い、教員はそのどちらも支援する。多様な個性を認め合う文化ができてきた」と後田先生。そんな進学校の変革に、キャリア検討会の果たした役割は大きいという。



左から、教務主任・後田康蔵先生、
進路指導主事・園田浩二先生。

探究と進路を一体的に設計し 生徒の進路実現に伴走

青翔開智中学校・高校(鳥取・私立)

進学先と「探究のテーマ」を
セットで発表

青翔開智高校は、卒業生の大学等合格実績を、各生徒が在学中に取り組んだ探究テーマとセットで発表している(図1)。2014年の創立以来、建学の精神にも掲げる「探究」を軸に、新しい学校づくりに取り組んできた同校。探究と進路を一体的に設計する教育方針が、こうした発表方法にも一貫通貫している。

探究と進路のいずれでも、目指すのは、生徒一人ひとりの中にある「興味」「能力」「価値観」、そして「社会」の4点が重なり合う、自分の核を見つけることだ(図2)。これを基に6年間の探究プログラムを構築。探究スキルの習得とともに、企業や世界のさまざまな課題解決などに取り組み、集大成として高2で自分の核に基づく個人テーマを設定し、探究を深めて論文にまとめている。

個人探究の支援には教員全員であたる。最初は多くの教員との対話を通じて多様な考え方に触れさせ、テーマが定まってきたところで担当教員を決め探究を個別に支援。そしてその教員が、そのまま進路決定プロセスにも伴走するのだという。生徒の活動状況はデータで蓄積し、担任を含む教員間で共有。職員室では教員同士が絶えず生徒を話題に話し合う。「共有システムや会議以上に、日常的な話の積み重ねが生徒支援の力になる」と森川先生。

探究でホスピスのあり方に取り組んだ生徒は医学部へ、食品のアレルギー表示に取り組んだ生徒は農業系学部へ進学するなど、多くの卒業生が探究のテーマや経験を軸に進路を決定。

「生徒が自分で考え、自分で学力を上げ、自分で進路実現する。そのために我々はどのような支援をすれば良いかを常に考え、自己調整学習など新しい取組も導入していきたい」(織田澤校長)

大学名称	学部/学科/専攻	探究活動で決めた進路
東京	経済学 経済学専攻	ホスピス施設とつながることで患者の心を癒すことのできるの探り→日本の課題のホスピス施設
岡山	人文・文化学部/人文学専攻	アフリカ文化・経済の調査から地域との関係の再構築を軸にする
岡山	経済学部 経済学専攻	高齢者のデジタル活用を軸にする
山形	工学 工学専攻	機械を軸にする下は所蔵の3Dプリンター活用
京都工芸繊維大学	工芸学部 工芸専攻	専攻に合わせたデザイン制作
鳥取	総合理工学部 工学・デザイン専攻	地域課題を軸にする

図1 卒業生の合格一覧。左2項目が進学した学校と学部学科名、右が探究論文のテーマ。

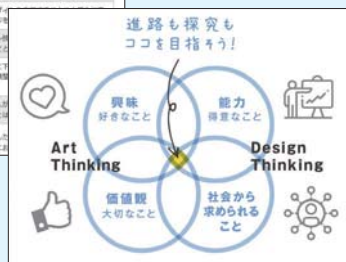


図2 偏差値だけではない多様な価値観をゲームを通じて学ぶなどし、4つの円が重なる部分を探究と進路につなげていく。



左から、織田澤博樹校長、
進路支援主任・森川真吾先生。